

ソハの地下水道

—戦争を風化させてはいけない—

第2次大戦が終っても、冷戦時代には語られなかった戦争の真実が、最近、体験者の証言として続々出てくるようになった。64号で紹介の「サラの鍵」は、フランスの歴史の暗部<ヴェルディヴ事件>を告発した作品。ナチス占領下にあったフランスは1942年7月16・17日に、ナチスの指示でユダヤ人を一斉検挙、ヴェルディヴ屋内競輪場に集めアウシュビッツに送ったという事実である。あれから70年経た現在、その事件を知らないフランスの若者たちは70%もいるという。フランス人の手でアウシュビッツに送られたユダヤ人は7万6000人にのぼるといふが、そのうち2500人ほどの生還者がいるそうだ。8月4日から公開の「あの日あの時 愛の記憶」はまさにその生還者の体験の実話である。どのようにしてアウシュビッツからの脱走に成功したかというカップルの話。信じられない話だが、だからこそ事実は小説より奇なりである。チャンスがあったら「あの日あの時——」の鑑賞もお勧めしたい。歴史が生んだ悲劇を闇に葬ることなく、愚かな戦争を繰り返さないために、証言者の記録はしっかり心に留めておきたいものである。

この「ソハの地下水道」も実在の人物たちが語る戦争実話である。1943年、ナチス占領下のポーランドの街ルヴフ(現在のウクライナ領リヴィウ)のできごと。市民のだれもが自分の生活に手一杯であるうえ、ナチスの横暴に怯えながら暮らしている。主人公のソハは下水修理工。ある日、地下水道に逃げ込んできたユダヤ人の集団を発見する。ナチスに通報すれば報奨金が貰える。それとも……。明日の命さえ分からない日々。貧しい労働者にすぎないソハは、愛する妻と娘をかかえ、空き巣も詐欺も平気でしでかす狡猾な男。ソハはユダヤ人たちの提案を受け入れることにした。潜伏する彼らを匿うことで、その見返りとしての日銭を稼ぐことだ。この地下水道はソハにしてみれば自分の家の庭のようなもの。隅から隅まで知り尽くしている管理人のような存在。ナチスに地下水道に変化はないか、と聞かれて「何もない」と答えれば、それで済むのだ。その日からソハはユダヤ人たちに、せつせと水や食糧を運ぶ。だが、このような生活がいつまでも続くはずはないと、妻子は不安に怯え、若い相棒は去っていく。その直後のことだ、相棒が公開絞首刑に会い、見せしめに死体は吊るされたまま放置されている。たまたまそこを通りかかったソハは愕然とする。ポーランド人である相棒がなぜ？その理不尽さからソハは、ユダヤ人たちに対する気持が変化していく。暗くて、悪臭が漂い、ジメジメした地下水道。雑魚寝するユダヤ人たちのまわりを走るねずみ。こんな劣悪な環境のなかでも、彼らは一生懸命に生きようとして

いる。小社会の一面を見るような気がする。こんな小さな集団なのに、金持ちもいるし、腹黒いやつもいる。仲間同士の対立があり、恋も不倫もあり、カップルの誕生・妊娠・出産と、彼らの生活は14か月も続く。実に人間らしく逞しく生きている。その生活を見てきたソハ、もう以前のソハではない。損得抜きで真剣にユダヤ人たちを守ろうと、彼らと運命共同体となって、闘いに巻き込まれていく。時代に翻弄されたポーランド人たちの実態も見えてくる。

(9月22日〈土〉より、TOHOシネマズシャンテほか全国順次ロードショー)